

つないでもらった命

豊見城市立豊見城中学校一年 大城 壮太

六月二十三日、テレビからは全戦没者追悼式の様子が流れている。曾祖母と私は正午の黙とうの時を静かに待っていた。曾祖母の表情は、どこか重苦しさをまもっていた。黙とうが終わり程なくすると、曾祖母が一言

「戦争はダメだねえ」

とぼつりとつぶやいた。その瞳には涙が浮かんでいた。その言葉は、テレビに写るどんな偉い人が述べる追悼の言葉よりも、強く深く私の胸につきささった。

曾祖母は六歳の時に沖縄戦を経験している。幼い足で戦禍を逃げ惑う日々は、想像を絶するものであっただろう。曾祖母の右太ももには銃弾が貫通した傷跡が痛々しく残っていた。幼い時に傷跡が気になり傷跡について聞いた事がある。曾祖母は優しく穏やかに、沖縄戦で銃撃にあったことを話してくれた。

「不思議ねえ、銃の傷は入口よりも、出口の方が大きい傷跡になるの。」曾祖母の優しい口調に反して語られる体験は凄惨なものであった。曾祖母は戦禍を逃げ惑う中で母を失っている。大きな傷を負った母を置いて逃げざるをえなかったこと、遺体を探すことができず、亡くなったであろう場所で石を拾い遺骨代わりにお墓に納めていることなど曾祖母の体験を通し、わずかではあるが沖縄戦の実相に触れることができたように感じた。

このような体験をしたのは曾祖母だけではない、曾祖父もまた同じように左足に銃の傷跡がある。曾祖父は長男であったため県外への疎開が許されず、沖縄戦に否応なくのみ込まれていた。逃げ惑う戦禍の中で足に銃弾を受け、大ケガを負いながらも強い意志で生き延びた諦めなかった曾祖父。私とさほど変わらぬ若さでただ一人戦禍を生き延びたその胸の中にはどれほどの強い思いがあったのだろうか。曾祖父は生前「おじいちゃんは、戦争で学校に行けなかったから、大人になってから

高校に行ったんだよ。」

と話してくれた。戦争という荒波の中で、家を失い、家族を失い、そして学ぶ機会さえも奪われた曾祖父。それでも、過去に押し潰されることなく、失ったものを取り戻すかのように、戦後懸命に働き家族を支えた。そして子育てが一段落してから高校に通い直し、ついには還暦を迎えた年に大学卒業を果たしたのだ。どんな逆境にも諦めず努力を重ねるそのしなやかな意志の強さを私は心から尊敬している。

今、私がここに生きていられるのは二人の曾祖父母だけでなく、八人全ての曾祖父母が、戦中、戦後という過酷な時代を生き抜き、命を私までつないでくれたからである。銃弾で重傷を負いながらも生き延びた者、食料難の中で飢えをたえしのんだ者、マラリアを乗り越えた者、その一つ一つの苦難の先に、今の私の命があるのだ。そこには、決して奇跡という言葉だけでは片づけられないほどの尊い命の選択と、生き抜こうとする強い願いがいく重にも重なりあっているのだ。

今、私は自分自身に問いかける。このつないでもらった命を平和のためにどのように生きるべきなのかと。今日もメディアから流れる戦争情報に胸をしめつけられ、同時に自分の無力さを痛感する。戦争を止める術を持ったわけでもなく、誰かの命を救えるほどの力もない。そんな自分にいったい何ができるのか。そう自問し打ちのめされる。それでも平和のために何ができるのかを問い続けられる私でありたいと思う。生き延びた曾祖父母たちのように。

問い続ける中で「積極的平和」という言葉を知った。今の私にできることはあまりにも小さく、平和への道のりは果てしなく長い。それでも、その一歩を踏み出さなければ何も始まらないのだと気づかされた。だからこそ、まずは他者を受け入れ、多様性を尊重すること。対話を諦めないこと。思いやりのある行動を選び続けること。そして世界情勢に目を向け学び続けていくこと。それらを通し、身近な暴力の芽を摘み取っていききたい。そして、その分を埋めるように、いつくしみや感謝の種を一粒ずつまいていく。そんな小さい行動を積み重ねながら平和への道を歩んでいけるよう、つないでもらった命を私は生きていきたい。